

第1回 市立幼稚園における特別支援教育等に関する検討委員会議事録（要旨）

1 日 時

令和3年（2021年）5月21日（金）午前10時～午後12時

2 場 所

熊本市役所別館 駐輪場8階 会議室

3 委員（順不同）

出席委員：亀井委員、菊池委員、豊田委員、齊藤委員、梅田委員、西委員、
伊藤委員、矢野委員、勝本委員、野口委員、宇治野委員、松葉佐委員
欠席委員：なし

4 次第

- 1 委嘱状交付
- 2 教育長挨拶
- 3 委員紹介
- 4 開会
- 5 委員長・副委員長選出
 諮問
- 6 議事
 - (1) 検討会議の趣旨・目的
 - (2) 本市の現状
 - (3) 本市の基本的考え方
 - (4) 検討の方向性
 - (5) 今後のスケジュール
- 7 諸連絡
- 8 閉会

（委員長）

本検討委員会における検討の方向性の論点として挙げられております、熊本市立幼稚園において特別な教育的支援が必要な子どもをどのように受け入れていくかということ、それから幼小連携の効果的実践と先駆的研究をどのように展開し発信していくかということ、さらに公私やそれから幼児教育施設の種別に関わらず幼稚園教諭等の資質向上のためにどのような取り組みが必要か、以上のような3点についてこれから意見交換をしてみたいと思います。

項目を絞りませんので、ご自由に今のご説明の中からお感じになったことをお話しいただければと思います。

（委員）

資料6ページの方向性案を拝見しますと、北区は一箇所、楠幼稚園がやっておられて、北区は人口が少ないのであまり必要ないとか、足りているということでしょうか。

(事務局)

5区にバランスよく配置をと考えているところですが、既存の幼稚園の施設や、今ある資源を有効活用して考えた案です。特に植木地区は距離がありますので、小学校の空き教室など、子どもの人数が少なくても使いやすい・通いやすい施設なども含めて検討していきたいと思います。

(委員長)

現状では市立の6幼稚園の施設を利用して行われておりますので、これを更に拡充するために、今ある園をどのように充実していくかということと、方向性案の東区と西区に小学校の空き教室を活用するという点について、委員からは北区の方が少ないということでしたが、事務局では、今後、空き教室等を利用した形で進めていけるのではという見通しは持っているということでした。

(委員)

保育園の現場からお話ししますと、年々、情緒障がいや気になる子ども達は増えるばかりです。その中で一番懸念されるのが、就学についてどう小学校に接続するかということです。提案されているように、通級等の増設は非常にありがたいと思っています。今後そういった子ども達が減少するということはあまり考えられませんので、先々、拡充したり増設したりしていただけたらと思います。

(委員長)

本委員会の2本目の柱にありました、幼小連携の推進も含めた上で、就学への接続にとっても課題を感じていらっしゃるということで、さらに拡充していく予定があるということは本当に望ましいということですね。就学への接続については、他の面でも様々課題を抱えていると思いますが、特別支援に関することは今でも園と学校とでやられていますが、まだ課題は大きい現状があるということだと思います。

(委員)

ことばの教室・あゆみの教室は、今年は定員を大きく超えて受け入れをされているようですが、それに対しての教員の数は増減があったのか気になりました。今から大きく受け入れていくということですが、一人一人に目が届くのか疑問に思っています。

(委員長)

ことばの教室は定員を超えている状況もあり、指導者の数と一人一人への配慮ができる状況にありますかというお尋ねです。

(事務局)

指導者の数ですが、通級は基本的に1対1で、限られた時間ではありますが、丁寧な対応ができていますと考えております。

あゆみの教室も少しずつ人数が増えてきていますが、現計画では大幅にその人数を増やすというよりは、1箇所集中しているところを広げていくということで、必要に応じて増員も検討していくことになると思います。限られた資源ですので、希望通りに増やせるかどうか

かはまだ言えないところですが、これまでは数年間で少しずつ指導者を増やしてきた経緯はあり、あゆみの教室ができた時は増やしました。

(委員)

職員の専門性向上に対してはどのようなことをお考えでしょうか。

(事務局)

専門性の向上については、ことばの教室・あゆみの教室も非常に専門性の高い内容です。熊本市は特別支援教育枠の採用を行っており、免許を保有した者の採用枠の先生を中心に、ことばの教室・あゆみの教室にあたっていただいております。元々、幼稚園での教育に長けた先生の中から特別支援教育をやりたいという先生を含めて行なっているところです。

言語につきましては、県と一緒に熊本県難聴・言語教育研究会という先生方の勉強会もあり、子ども達の指導に対して、小学校の先生方や県の先生方と一緒に勉強する会もあります。また、市教育委員会が主催する、通級の先生方や小学校・中学校の先生方の研修会に幼稚園の先生方にも入っていただき、縦と横の繋がりを踏まえ、丁寧に先生方の資質力向上を図りたいと思います。

(委員)

ことばの教室に関する事で、東区に小学校と連携したことばの教室ができるということで、東区になかったので、増やしていく方向性はとてもありがたく、園児で発音の気になるお子さんがいますが、言葉や言語に特化した施設は少なく、私たちも次のステップを保護者にアドバイスできなかったのが大いに期待しております。

また、他の委員もおっしゃられたように、情緒面で気になるお子さんが増えており、小学校の校長先生とお話する中で、入学後、上手く環境に対応できずにお子さんが困っておられるような状態が見られます。保育園や幼稚園と学校との連携・接続が上手くいけば、子ども達も笑顔で通学できると思うので、それも非常に気になっているところです。

(委員)

保護者アンケートの件でお尋ねです。保護者ニーズを把握するために、対象を絞ってアンケートを実施されていますが、回答率が4分の1程度ということで、これをもって保護者のニーズとはなかなか言えない部分もあると思うのですが、回答率の低さについてお尋ねしたいです。

それから、ことばの教室・あゆみの教室について、あゆみの教室は令和元年から、ことばの教室は平成30年度からの実績が記載されており、かなりの人数の実績があると思いますが、その3~4年間の効果検証がされているのか、またその結果はどのような状況だったのでしょうか。

確かに言語についてはアンケートの結果からも一番ニーズの高い所ではあることがわかりますが、私も現場におりまして、保護者の最初の不安や課題は確かに言葉の問題は大きいと思います。ただ、言葉だけではなく、言葉も含めた子ども達の育ちに関するいろいろな課題はどうしても切り離すことは難しいのではないかと考えております。あゆみの教室もこの方向性案の中では、川尻幼稚園、碩台幼稚園、楠幼稚園、一新幼稚園、隈庄幼稚園に追加されていますが、先ほどから出ております、地域の拠点施設となるのであれば、少し地域的に偏在しているような状況も見られますので、この辺りの充足・補填をどのように図っていくの

かということも併せてお尋ねしたいです。

(事務局)

一点目のアンケートの回答率について、特に小学校の特別支援学級等にお子さんが通っている保護者については、その当時を思い出して回答してもらうため、難しさがあつたかもしれませんが、明確な理由は把握できていません。割合的には、現在の園児の保護者と小学校の保護者の回答率は一緒になったという結果になりました。

(事務局)

効果について、ことばの教室では、支援が必要な状態で幼稚園に相談があり、年長の1年間、勉強するわけですが、それが就学にいろいろな効果があるという側面があると思います。小学校に上がった段階で移行支援シートを使って引き継ぎをしておりますので、小学校でその指導というのは生かされており、就学の間というよりも幼小連携・接続、その部分で安心して小学校に上がっていかれているという報告は受けています。

あゆみの教室につきましても、小学校に入学したお子さんについて、幼稚園から小学校に行き情報共有やいろいろな接続をしたいと考えていましたが、新型コロナウイルス感染症の関係でできなかったのも、そのところがまだ課題として残っていますが、支援学級に進学されたお子さんも通常学級に進学されたお子さんも、幼稚園で学んだことが小学校の中で生きているという報告は受けています。委員の中には、幼稚園の先生、園長先生も、元幼稚園の先生もおられますので、そちらから聞いていただいても詳しいことが分かるかもしれません。

我々としては、まず保護者が幼稚園段階で子ども達の発達に関する相談ができ、そしてそのことを幼稚園として受け止め小学校に繋ぐというシステムが、ことばの教室・あゆみの教室という形できちんと行われているということが、保護者の安心になって良い結果に現れていると思っております。

(事務局)

3点目の地域の拠点施設につきましては、市立幼稚園6園の施設自体が、市内にバランスよくあるわけではありませんが、小学校・中学校まで含めると教育施設としてはかなり広範囲にありますので、出来る限り、使いやすい、通いやすいような所にと考えています。

一方で、市立幼稚園が受け入れている園児数が、ちょうど3歳から5歳の子供達で、熊本市の1%程度しか直接関わっていませんので、幼稚園と保育園、市立と私立と、バランスよくカバーできる場所はカバーし合いながらできるのであれば、例えば、市立保育園などでそのような機能を果たしているところがあれば、同じ場所に市立幼稚園としてそこを重点的にカバーしなくてもいいと思いますので、6園だけのバランスではなくて他の施設とのバランスも考えながら検討していきたいと思っております。

現段階では通級を既存の幼稚園の施設の中に作ることで考えていますが、北区に希望があってもなかなか通えないということであれば、北区の小学校の空き教室に通級を作るということも含めて検討したいと考えております。

(委員長)

ありがとうございました。ことばの教室・あゆみの教室については、その成果はそれぞれ

関わって頂いた小学校・幼稚園の先生方がいらっしゃいますので、その辺りも含めてお話をいただければありがたいと思います。

(委員)

私は二人の子育てをしております。下の子が今3歳で、重症心身障がい児です。少しでも保護者の声を届けたいと思って発言しております。よろしくお願いします。

まず、質問ですが、資料3ページにある特別支援学級在籍者の推移について、知的、自閉症の子ども達が増えているのは一目瞭然ですが、肢体、病弱、弱視、難聴は横ばいで、若干の推移をしている。この子ども達についての特別支援教育はどのようにお考えかというところを伺いたいのと、もう一点はコア幼稚園というのは具体的にどういうことを目指して進むのかということをお伺いしたいです。

(事務局)

それでは一点目の資料3ページの特別支援学級在籍者について、難聴、病弱、弱視、肢体不自由の子ども達は増えていなくて、知的と自閉症・情緒の子ども達の支援が増えているということではありますが、できる限りいろいろな支援が必要な子には支援していくという形では取り組んでいるところです。ただ、この小学校の特別支援学級というのは、通常学級と支援学級が通常の学校の中にあるのですが、それとは別に支援学校というのがありますので、少し重度になると支援学校の方に在籍している子どもも出てきます。このグラフではどちらかという、自閉症・情緒は割と軽度の子どもが多いためこのような結果となったのではないかと思います。

(事務局)

知的と情緒の方が増えていて、そこに対する支援というのは学級数も増えているということだと思いますが、制度としましては、幼稚園の年長の段階で就学支援委員会に諮り、そこで判断を得た上で、保護者が小学校段階でどういう就学・学びをされるかということと一緒に考えていくという一つの制度があります。横ばいの子ども達も、熊本市の小・中学校で学びたいということであれば、教育委員会で支援学級をつくり、小・中学校の中で教育を行っていくということになります。

(委員)

小学校はそのような制度があることは知っていますが、そこに向けて幼小で連携していくのであれば、幼稚園も少数派であろうと受け入れを増やしてもいいのではないのでしょうか。自閉・情緒の子達をメインに検討しているように感じますが、例えば医療的ケア児の検討も一緒にされてもいいのではないかと思います。

(事務局)

幼稚園につきましては、幼稚園の段階でも受け入れをしていこうということですが、幼稚園段階でこの子はこういう支援が必要だというのがはっきりわかっているお子さんもいると思いますが、やはりまだ小さいので、保護者の認識も含めて、この子にはどんな支援が必要なのかということを発達段階としてまだ探っておられることも多いことがありまして、言葉

なのか情緒面なのかよくわからないというようなことも含めてご相談になることが多いので、今のところ、子どもの相談をまずしっかり受け止めて、それに合った支援をどうすればいいかということを考えていただいているというのが現状だと思います。

あと、医療的ケアというのが先程ご質問にあったと思いますが、本年度も12校の小中学校に看護師を配置しております。今度、運営協議会を立ち上げますが、その要綱の中には幼稚園もありまして、市立幼稚園の中には医療的ケアが必要な子どもがおられる場合には、教育委員会から看護師を配置することも今のところ我々の体制としてはあるところがございます。

(事務局)

2点目のコア幼稚園について、市立の6幼稚園の方が優れているとかそういうことではなく、市の教育機関として市の財源を投入して運営をしておりますので、その分、幼稚園の中のいろいろな取り組みや研究などを、私立幼稚園やいろいろなところに還元できるような情報を提供することにも力を入れて取り組みたいと思います。

また、特別支援教育に力を入れるということは、なかなか私立幼稚園でも市立幼稚園でもあまりカバーできていないところは、公的な財源を使いながら、市立の6園が担っていく部分もあるのではないかとということで、今日ご参加の委員が特別支援教育についていろいろなノウハウとか、これまで積み重ねられたご経験がおありと思いますので、教えて頂きながら、これまでカバーできていなかった部分をしていけたらと考えているところです。結果的にはコア幼稚園としてどれくらいの情報や研究成果、良い取り組みを発信できるかというのは今から検討していくところです。

特に幼小連携辺りは、市立幼稚園と市立小学校とは連携しやすい面がありますので、そういうところは特にどんどん情報提供をしていける部分かなと思います。今後は特別支援教育に関しても市立幼稚園の6園で中心的にカバーできることがあれば、そのことも発信していけたらと考えています。

(委員)

今の回答を受けて、特別支援教育の充実ということに対して、ただ対象者が多いということで目立っていますが、肢体も病弱も難聴、弱視の子も受け入れてないというわけではないということですね。ただ対象が多いからそちらをメインに検討しているということですか。

(事務局)

特にどこをメインというのではないのですが、方向性として、通級を増やしていこうとしています。割と通級へのニーズが高いことがアンケートの中ではありましたので。ただ、少ないニーズだからそこを考えないということではありません。

(委員)

ありがとうございます。それを聞いて少し安心しました。保護者の立場から、うちの子は児童発達支援センターに通っていますが、小さい幼稚園のような感じで、手厚く、いろいろなイベントがあります。でもその中でなぜ幼稚園を選ぶかというと同年代の子どもと同じよ

うな体験をさせたい、集団ではこの子はどういう動きがあるのかというのが見たい。また定型発達の子達についてもどのような関わり方をすればいいかなど、メリットとして大きいのではないかと思います。なので、保護者は児童発達支援センターとか障がい児に特化した施設を選ぶのではなく幼稚園を選択したいと思います。

(委員長)

ありがとうございました。そういうご要望ということですね。今ここには特別支援のご専門の先生方がたくさん出席していただいておりますので、そういう立場からご意見いただければありがたいですがいかがでしょうか。

(委員)

支援学校は、子ども達に丁寧に関わっていける状況があり、とても子ども達が成長していると思います。ただ、小学1年生への支援の必要性はとても高いと感じています。今度の幼稚園段階での子ども達への関わりには、やはりマンパワーは必要だと思っています。ですから学級の担当者が何人なのか、もし教諭が難しいようでしたら特別教育支援員とか、そういった人を入れながら手厚くしながら育てていきますとか、そういう方向性を次回示していただけたらありがたいと思っています。

やはり各園に通級があるとそこの中の通常の活動もやりやすいということで、各園に通級が広がっていくとそこでできることが増えます。各小学校にも通級があればいいかなと個人的には思っておりますので、通級が広がっていくと今までやってきた幼稚園の強みも活かせる形ではないかと思いました。

一番難しいのは、やはり向山幼稚園の支援学級。逆にここは通級がないという形にするのか、この学級を通級的な運用として、ことばの教室を学級として扱うのか、そこは検討が必要かと思えます。

支援学校の1年生も、小学1年生の段階でもどういう教育の場が必要か、非常に保護者の方も悩まれるでしょうし、その伸びもわからない部分があるので。通級は、今、年長さんですよね。なかなか3歳4歳でも子どものその後の伸び、必要なものという判断が難しい。だからやっていく必要性もあるという感じはします。

熊本県の支援学校の幼稚部があるのが、盲学校、熊本ろう学校、松橋東支援学校の三つしかない。そこは障がいのはっきりしていて、内容も決まっていて、別にしたほうがいいということがはっきりしているところなので、それ以外の参考にするところとかも難しくなってくるので特に向山幼稚園のあり方についてはもう少し具体的に検討が必要になってくると感じています。ただ幼稚園段階で、就学前の段階で手厚くしていくことはとても大事であろうと資料を見て思いました。

(委員)

今、お話いただいた件で、私の方からお伝えしたいことは、今はあゆみの教室・ことばの教室、5歳児からということで、年長さんに限られていますが、ことばの教室に関しては、年少さんからというのは、なかなか判断が難しいところだと思いますが、あゆみの教室に関しては、やはり3歳児からでも対象となる方というのは、保護者の方も分かってらっしゃる方もいらっしゃいます。昨年、私の息子が年少の時、やはり支援が必要というのがわかっていらっしゃって、お母さんも一般の普通の学級に入れて、その中で生活をさせたいとい

う思いがあられた方だったんですけれども、やはりその3歳児の受け入れというのはなくて、非常にお母さん自体も大変な思いをされたんだと思いますが、今年、転園をされました。非常に悲しいことだったと感じております。そういったところの受け皿として、やはり3歳児4歳児5歳児をみられるような、ことばの教室・あゆみの教室というものが必要になってくるのではないのかなと感じております。

(委員長)

貴重なご意見をありがとうございます。これにつきましては、今後、さらに皆様方のご意見も伺いながら方向性も定めていけたらなと思っております。

(委員)

特別支援教育とか発達臨床が専門ということもありますし、また熊本市の療育支援ネットワーク会議とか、あるいはその就学支援委員会を長年務めておりますので、そこの議論とか役割とか関連性が非常に強い案件だなというふうに思っております。療育支援ネットワーク会議にご専門でご参画いただいている委員もたくさんいます。ひと口に特別な支援が必要な子どもといっても、そこにはいわゆる障がい程度であるとか種類など非常に幅の広いお子さんたちがいるので、どういうシステムというか、支援の体制づくりをしていくのか、ということについては非常に難しいかなというふうに、今議論を聞きながら思いました。例えば先ほどから出てます、いわゆる重症心身障がい児であるとか、医療的ケアが必要なお子さんですね。特別支援学級の在籍者の推移のグラフのところ、非常に自閉症・情緒学級とか知的学級の在籍者数が非常に伸びが大きいし、桁数が大きいので、ほとんど増減がないように見えますけど、実は病弱だけ抜き出していくと、この10年間で、例えば3倍4倍ぐらいのペースには、実はなっている。ですので、むしろ、その自閉学級の伸びよりもちょっと大きい位だと。ここに関しては私が補足することでもないですが、教育委員会が非常に頑張っていて、看護師の配置、看護師の確保であるとか、病弱支援学級の新設であるとか、その辺りでは、常に頑張っていて、特にここところはかなり推進してきたな、充実してきたな、と感じています。もちろんそれが保護者のニーズを完全に満たせるかどうか、そのレベルまで達しているかということ、まだ足りない部分もあるのではないかと、ここは継続的に改善していただくことかと思えます。ただ、幼児教育の段階で言うと、特にその重度の対象のお子さん達というのは、基本的には、枠組みとしては、いわゆる児童発達支援センターとか事業所に担っていただくというのが、ある程度前提になっている国の政策ではないかと思っております。医療的ケアが必要なお子さんは特に。

ここで方向性案として打ち出されています、いわゆる通級の拡充というのは、おそらくそこまでの医療的ケアなどを必要とするお子さんたちを念頭に置いたものではないと思えますし、あるいは支援学級も、学校教育法とか標準法で定員が決まっている部分で考えると、一学級で8名という定員で考えますので、そこまでマンツーマンのその体制が組めるような、そこまでの対象とするお子さん達を念頭に置いている訳ではないだろうと思うのです。この計画案からしてもですね。

そこで1つ、これは幼小連携とか、あるいは私立の幼稚園・保育園などとの連携みたいな話になると思いますが、例えば重度のお子さん達に対して定期発達と我々は言いますが、その障がいのない子ども達と、いわゆる交流の機会を確保するという問題は、おそらく支援学級とか通級の枠として増やすということ以外にもできることはたくさんあるのかなと思えます。例えばその制度としてその交流の機会を増やすであるとか、あるいは、いわゆる通常の

学級の中に並行通園をするような形で行って、その児童発達支援事業所として専門的な療育を受けながらも、週・月に何度かそういう交流の機会を作るといったような施策は、重度のお子さん達に対するものとしては考えられるのではないかと思ったところです。この今回の審議事項とはずれるかもしれませんが、そういったいわゆる幼児教育と特に福祉分野の連携といったところが非常に重要になるところかなと思いました。

あともう1つ、そう考えると、今回の方向性としてはニーズが高いというか、量的に非常にその必要度が高くなっている行動面であるとか情緒面に課題があるお子さん、ないしは、その言葉の発達に課題があるお子さんに対するそのシーンを拡充していきましょうという、その方向性の案だなと思っています。だから問題は、それに関して市立幼稚園がいわゆる、こういった通級とか支援学級を設置して、それで支援を充実させていくんだというのは、リソースを増強していくという意味で、これは私の立場からしても願ったり叶ったりといったところですが、問題はあと1つ、積算根拠だなと思っています。私は就学支援委員会をやっていますが、例えば新一年生の特別支援学級とか特別支援学校の入級審議だけでも年間200件位はきます。さらに言えば、支援学級に入るわけではないが、特別な支援が必要だというお子さんの方がむしろ多いと思うので、それまで考えると、とてもこの定員数で、年長だけでも多分足りないし、3歳児4歳児もまず足りないなと思っています。それを全部カバーできる分の定数を確保するというのは無理だなと。予算的なものもあるし、人間的なもの、専門的ないわゆる資質を持った担当者をどれだけ確保するのかということに関しては、かなり長いスパンをかけて考えていく問題だと思うので。だから、その将来的な拡充の必要性を見据えながら、まずはここで開設して行って、開設しながら人も育てるような。ここで専門的な資質を持った人を育成しながら、更にまた新規に拡充していくというような、そういう将来プランができればいいかなと思います。児童発達支援センターとか事業所とか、あるいは市立・私立の幼稚園・保育園なども役割・住み分けのようなことをしながら、市立幼稚園の中で特別支援教育を推進していくという枠組みをしっかりと作っていければいいのではないかと、資料と委員の議論を聞きながら考えているところです。

(委員)

これまでも、毎回計画される度に出ていたことだと思いますが、今日議論していることは、最終的に目指している形の議論をしているのか、その最終的に目指す形が先にあって、その中間の通過点としてこういうところを目指すという議論をしているのかが、ちょっとわからなくて。通級を作ってとかいわゆるインテグレーションみたいな、障がいのある方ということをある意味で分けて、それをどうやってバリアフリーするか、のような考えなのか、それがダメという話しではなく、最終的にインクルージョンの方についてユニバーサルでどんな子ども達もどんな人達も利用できるということを考えていくのか、障がいと見るのか、一部の障がいとしてみるのか、全体の個性・特性と見るのか、というのは最終的には違うのではないかと思っています。だけどインクルージョンとかユニバーサルっていいねっていいですが、それはどの施設、小学校も市立幼稚園も保育園もそうですが、それがそういうデザインに出来上がっているか、物的にも人的にも出来上がっているかという、今は出来上がっていない。だから、そこに至るために最終的な目標はそちらだけれども、そこに至るまでにそれができるような場所として、こういうものが必要だ、だから一旦、通過点として考えるのか、これが最終的な形であってそれを目指すのかというのでは、全然やり方が違うのではないかと思っています。例えば、この市立幼稚園自体を残すかどうかというようなことも、

例えば合志市ならそもそもないです、先ほどは市立幼稚園が少ないと話していましたが、これだけあるっていうことはある意味では貴重な財産と思います。

最終的には子どもも減っていくし、例えばそのユニバーサルということが全園に広まって当たり前になったら、その役割を果たしたわけだから、いらなくなるのか、または形を変えるのか、そんなこともありえるのかと思っています。皆様はもうわかった前提でお話されているかもしれませんが、ちょっと見えなくて迷っています。

ちょっと話はずれるのですが、Aの物を買うかBの物を買うかと聞かれた時に、選択するのはAかBだと感じると思うのですが、買うか買わないかということは選択肢に入っていないですね。ですので、この会議の目的が、例えば市立幼稚園を残すことが目的なのか、それともこの中に幼稚園教育の充実を図ると書いてありますけれど、その中で市立幼稚園の今後のあり方というのは、それはなくなることもあり得るということも含めて議論するのか、議論する位置がどのへんなのかということと、最終的な目標とか目的とはどんなものなのかを知りたいです。

(事務局)

市立幼稚園について、どういう幼稚園を目指すのかというのは、最終的には子ども達のためになる幼稚園にするためにどうすればいいのか、基本計画を立て、それに向けて運営していくこととなります。前回の幼稚園の基本計画の中では、8園のうち2園は民間移譲しました。今回は、これまで積み重ねてきたいろいろな研究や財産もありますので、それを最大限活用し、6園を熊本市の子ども達のためになるような教育を提供していくということを考えています。今年度末に新しい幼稚園の基本計画をつくる予定としており、その中の特別支援教育でどのような形が、市立幼稚園だけでなく私立幼稚園などと連携しながら、どういう教育あるいは福祉を提供できる形が1番いいのかということです。基本的には幼稚園は教育機関ですので、教育を中心に提供するということになるとは思いますが、特別支援教育に力を入れたとき、いろいろな機関がありますので、そこでニーズに応えられてないところを市立6園が担えるなら、そういうところも取り入れながらやっていけるようにしたい。

基本計画を策定する最終目標は、基本計画を6園の今後、少なくとも5年程度の計画になると思いますが、どういう形が熊本市の子ども達の為に役割が果たせるか、その中の特別支援教育についていろいろな経験とかいろいろなアドバイスをいただきたい。それを受け、基本計画を策定していくという作業になります。そのままいくのかということでは決めることは難しいと思いますが、やっぱり現に困っている子どもやその保護者を少しでも助けられるようにしたい。

先ほども話題がありましたが、いろいろな困り感を持っているお子さんや保護者もいらっしゃいますので、先程ありましたように、通級は小学校と繋ぐために5歳児で当初は設定されていると思いますが、そこを3歳児から受け入れるとか、将来的に大きく変えられるところはその方向を見据えながら、変えられるところから変えていくということを考えています。通過点と言えば通過点ですが、基本計画を本年度策定し、短期的なゴールに向けていろいろなご意見を頂いているところです。

(委員)

私もいろいろな資料を読ませていただきましたが、熊本市の、最終的に、こういう特別支援も含めて、どういう形を目指すのかというのがはっきり読めるものがなくて、それによって変わりますので。それこそそのさっきのインクルーシブ的な考え方でそのユニバーサ

ルなものを目指すとするれば、今、熊本市はギガスクール構想もすごく進んでいますけど、ICTを活用することでそのユニバーサル化が進められるかもしれないし、物理的な距離があるなら送迎を1本化して、私立幼稚園等の応援も含め、バスなどを共有してやっていくとか、今のオンラインで物の配送はすごく充実しているように、そういったところを公私も含めて連携してやっていくようなことも議論としてやると思いますが、今のお話を伺う限りでは、現状、その先のことはわからなくて、いわゆるインテグレーションの形の中で改善点を見つけてそれを改善していくという形、モデルチェンジというよりはマイナーチェンジという感じで、その目的が変わらない中でやって行くのかと思いましたが。そうすると、だいぶ考え方が変わってくると思っていて、例えば先ほど、東区と西区は市立幼稚園がなく、北区にも1つしかないわけですが、南の端の方にしかないのでもそういうのをどうするか、今のところ改善しようとするならば、小学校の空き教室を活用すると。もちろん、市の持っている財産を活用されるのはすごくいいことで、それはそれでひとつあっていいと思いましたが、今、民間移譲されたところにも入っているように、民間のところに入れていくという形はどうかとか、流れは逆ですが、今五福ことばの教室でそうされているように、今ある私立幼稚園・保育園でも小学校でもいいと思いますが、そこにその部分を担っていただけたらよりいいのではないかと思います。市立幼稚園の全部に入れていくように、それが最終的にはどの園でもされようになり、当たり前どの園でもそのサービスを受けられるようになったら間口も広がっていいと思います。資金も大量に必要にならないし、人口が減少している中で維持するのはとても難しくなってくるが、全園が担えばそこを維持する必要はなくなってくるわけで、そういったこともできるのではないかと思います。

あと、この連携の件も幼小との連携の話もあったので、ここにまさに書いてある通り、その市の小学校と市の幼稚園というのは同じ設置者がやっているのでも、そういう意味ではすごく連携がとりやすくて、すごくいい事例がたくさん出ているなど思っていて、それが特に市立の良さだと思いますので、それを最終的には私立にも全部広めるんだという前提として進めて、今後も、熊本市立だけでこうやっていくという報告よりも、最終的には私立に入れることを前提として、進めていくというのはどうなのかな、とっております。

割と、年齢が下のところが上のところに行くようなことも多い。逆もされていて、すごくいいなと思いましたが、だいたいの私立幼稚園が、今しているような取り組みというのは多いのですが、小学校の先生方が幼稚園・保育園・認定こども園にいらっしゃるでもいいですし、例えば熊本市独自の取り組みとして、免許資格を取るにあたって、とったら必ず最初の研修で実習期間を設けて何週間とか一緒に過ごすとか、そんなのもあると小学校の先生方に伝わるのかなと思います。アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムは当然、接続されていて、それを踏まえた上で小学校教育を行うこととなっています。先生方、当然現場の状況をご存じないといけないわけでしょうから、そういったものも幼小連携にとってはいいのではないかと感じました。

(委員)

今の最終的にどこをゴールに持っていくのかということに関して、特別支援の専門家の立場から、インクルーシブとかそういった話が出たので共通理解を図った方がいいと思いますので発言します。

インクルーシブ教育とかインクルージョンとか、実はこれには相当な段階があって、使う人によって意味することがかなり違うことがあります。昔、インテグレーションと言って完全統合する、ということにかなり近いイメージを持たれている、フルインクルージョンとい

う形態があります。要するに、教育的なところで言えば、支援学級とか通級も作らない、完全に同じ場で過ごす・学ぶということを目指すという形態です。これがフルインクルージョンという考えで、これを目指すべきだとおっしゃっている方も当然いらっしゃいます。

その反面、必要があれば、特に重度のお子さんなどそうだと思いますが、専門的な療育を受ける場もやはり必要だと。時と場合に応じて、状況に応じて、あるいは本人と保護者の希望に応じて、その場を選べるようにした方がいいというインクルージョン。これはモデレートインクルージョンとか部分インクルージョンといったような言い方をしますが、それが支援学級であったり児童発達支援事業者であったり、場の違うところでしっかりとその専門的なことを学べるように整備した方がいいという考え方がいろいろあります。国連とか国の障がい者施策委員会とかでもずっと議論していますが、障がい者権利条約批准においても、最終的に、50年後が100年後かわからないけど、フルインクルージョンを目指すべきだと打ち出されつつも、それをいきなり来年からやりましょうと言っても非現実的な話だし、あるいは本当にその支援が必要で、専門的な療育を受けた方がいいというニーズもあるわけですから、それを考えるとモデレートインクルージョンという体制を作っていく方がいいのではないか、という議論があります。日本は現在、モデレートインクルージョンを元にした、インクルーシブ教育システムを作っておりまして、つまり文科省が言っているのはインクルーシブル教育ではなくて、インクルーシブ教育システムを作っている。その中で支援学級の、例えば質の向上や通級の拡充であるとか、連続的な学びの場とかいいいますが、シームレスになるようにしていきたいとか、そういったようなことをやっています。

熊本市の特別支援教育は、幼稚園に限らず、全ての小中高含めて、まずはモデレートインクルーシブ教育システムを充実していくべきだろうと個人的に思っています。まずはそれが完全にできて、先ほどの量的な問題もありましたが、本当にすべての人が自由に、子どもの状況に合わせて選択できるだけのリソースをしっかりと作っていくことが必要だろうと思っています。将来的にそのフルインクルージョンをしていくにしても、やっぱりモデレートインクルージョンという形で10年とか20年のスパンがいいのではないかと考えています。

もうひとつ言うと、事務局の立場から言いにくいと思うので私が言うと、要するに、これは市立幼稚園の生き残り策をどう描けるかというお話かと思いました。特別支援教育の充実というのは、私立幼稚園などにはお願いはするけれど、ある程度、公費を投入した前提が必要になってきます。これはコスト面もあるし、人材確保的な面もある。そこで、市立幼稚園の役割を強化した方がいいのではないかと方向性かと思いました。特に、今あったように、市立幼稚園の定員充足率がこれぐらいなのに残すのかという将来的な議論は、多分、ほかのところであると思いますが、個人的な意見からいうと、OECD 諸国の中で、その就学前教育に掛ける公費投入は最下位レベルのこの国で、縮小するという議論はどうなんだと。その中でも発達支援が必要なお子さんにとって、それをされてしまうと、それはどうなのかと懸念するのです。だから、この方向性案で市立幼稚園の中で特別支援教育を強化して、そこでの実践や研究、そういったものを例えば私立幼稚園とも盛んに共有していく、あるいは私立幼稚園に通いながらも通級という枠で市立幼稚園にやってきて、それが今後の公立小学校に就学するときの一つの橋渡しの役割を果たしていくような。そういう官民連携のような。それは重度のお子さんに関しては、児童発達支援センターに通いながらも市立幼稚園との交流を含めてなど、そういった形でネットワークを作っていけるようになると、将来的にいいのではないかと考えています。

将来的なラインは、そこになんとかあるのかなと見据えていて、まず1つの形態として、支援学級や通級の拡充を今回行っていったら、そこでまた支援者を育てれば、リソースの

拡充もどんどんしていこうと、そのような方向性を目指していくのがゴールとしていいのではないかと考えています。そこに対する実際的な問題がどのようなことがあるのかということ、これから議論していければいいのではないかと考えたところです。

(委員)

今、たくさん市立幼稚園に対するご意見など伺いまして、一つ一つ深く受け止めております。現状としましては、先生方がおっしゃる通りで、今、市立幼稚園に支援が必要なお子様の入園を希望される方が増えてきています。その背景に何があるかは、保護者の方にお声をかけたりしましてもはっきり戻ってこないこともあります。聞いたところでは、園児数が少ないからしっかり手をかけていただけるのではないかとということが大きいというのは強く感じています。

また、ことばの教室も、今年度は特に多く希望をいただきました。その中には、言葉だけではないというお子さんもたくさんいらっしゃいました。保護者の方は、言葉を入りに、自分の子ども達をしっかりとみたいという思いを持ってここにいらっしゃっているのではないかと、総合支援課と話し合いをしまして、できる限りのお子さんを受け入れて、指導していく中でこれから小学校教育をどういうふうを受けていくか、保護者の皆さんもどういうふうにお子さんを育てていきたいか、というところが見える力になれば、ということをやっています。

皆さんと熊本市の幼児教育について一緒に考えていただく機会をこの会議を経てできればと思っていますので、子ども達が何を必要としているか、子ども達を中心とした考え方と共に、どう熊本市の市立幼稚園があればいいか、ということを考えて今日は参加させていただいています。

(委員)

小学校も幼稚園も勤務経験があります。この会に、市立幼稚園の特別支援教育の充実をどうしていくかというところで参加しています。色々考えはあるのですが、まず通級の拡充はとても大事だと思います。それぞれの幼稚園・保育園に通いながら、週に1回程度、個別にしっかりと専門の先生に向き合ってもらって、思いをしっかり受け止めてもらって、それが結局は就学支援へと繋がっていったらいいのすごく感じています。もちろん支援学級、支援学校それからもちろん通常の学級に進んで通級を利用するとか、保護者と一緒に、小学校も一緒に考えていくような場になるといいと思っています。

それから幼小の接続のことですが、保護者が1番言われるのが、小学校がどんなところかわからない、ということ。イメージとしては、みんな一斉に机に座って文字を書いたり手をあげたりという古いイメージがどうしてもまだ残っておりますので、まずは小学校のことを知ってもらう。自由に語りあったり席を移動したり、今はタブレットを1人1台持っていて1年生も使っています。そういう状況を知って安心してもらうとずいぶん違うのではないかと思います。そこを、もちろん小学校教諭も幼稚園のことを知って、幼稚園の時間割のない、主体的な活動や自ら選び取る遊びというところをしっかりと学ばせてもらって、逆に幼稚園の先生方も、小学校が机にずっと座って黒板を写すみたいな教育はしておりませんので、是非そこ辺りを理解していただいて、幼小連携や幼稚園教諭等の資質向上というところでも関わっていけるなと思いました。

通級の拡充という、まずそこからスタートして、幼稚園教諭等の資質向上とか市立幼稚園の役割であったりとか、そういうところと一緒に考えていき、いい方向にいったらいいなと思っています。

(委員長)

ありがとうございました。皆様方の思いや方向性というのは同じかなど、私は受け止めさせて頂いておりますが、今後、頂いた3つの論点について、さらにどういうふうに市立幼稚園でやっていけるか、課題は何か、それからどういうふうにやればうまくいくだろうか、というようなことについて、またさらに意見を頂きたいと思っています。それに向けて、先ほど伊藤委員からご意見いただきましたように、公私や学校の種類に問わず、連携してやっていけるということが大事なポイントだと皆様方のご意見をお伺いしながら思ったところです。

(委員)

お伺いしたいのですが、資料に外国籍の児童の受入れというのもありましたし、幼稚園教育要領の中にも特別な配慮を必要とする幼児への指導の中に、日本語の習得が困難な子ども達への支援があります。勤務経験のあられる碩台幼稚園と日本語教室がある黒髪小学校の状況なども話していただくと、碩台幼稚園の通級にも入れていけるのではないかと思うので御紹介して頂くと有難いと思います。

(委員)

碩台幼稚園では、場合によってはタブレット端末や携帯で翻訳したりなどしていますが、基本は日本語です。インドネシアとかパキスタンとか言語もさまざまで、英語もわからない子どももいるので、絵本などを使いながら、日本語や簡単な英語、慣れてきたら本人の母国語で数の数え方を逆に教えてもらったりして、生活の中で日本語を中心に英語で補足しながらという形です。子ども達は簡単な日本語はみるみる習得していっています。保護者には翻訳したプリント等を差し上げたり、会話も簡単な英会話で寄り添っているところです。

(委員)

通級の件で、向山幼稚園五福ことばの教室は少し場所が離れていますが、今後、各園に通級の教室を作っていくという計画は、園の中に作る予定なのか、それとも空き教室に作っていく予定なのか、新たに近くを借りるのか。隈庄幼稚園に関しては、今は教室が1部屋余っていますが、例年1~2クラスが人数によって流動的なので、教室が余らないという場合も出てきます。そのような場合はどうなるのか心配しています。

(事務局)

現在、検討中のものに、幼稚園の中に作るということを考えています。隈庄幼稚園は園児数がほかの園に比べると多く在籍していますので、その辺り、どのような形になるかは検討しているところですが、基本的には、他の場所を借りることは、今は考えていません。

(委員)

今後、検討した方がいいだろうと思うことについて。今回、市立幼稚園に支援学級を設置するという計画がありますが、実際スタートしてみると、おそらく定員8名で組むしかあり

ませんので、いわゆる標準法の範囲で1学級です。ところが、おそらく実際のニーズとしては、重度のお子さんが入級を希望されてくると思います。そうすると、そこでの体制作りは看護師が必要になるのではないのでしょうか。このあたりをどう考えるべきか。最初から、対象はそういったお子さん達ではありませんと、はっきりしてしまうのも問題があるような気がしますし、でもそれは現実的にはハードルが高いだろうし、ここに対してどう考えるか、おそらく議論が必要ではないかと思えます。

(委員長)

ありがとうございます。今後、議論していく上で、その点も皆様のご意見をお伺いしたいと思っておりますのでご検討ください。

(委員)

私もこの検討会の目指すところというのが、先ほどのお話を聞いてよくわかりました。生き残りというような表現を使われましたが、新たな市立幼稚園が新たな価値というものを作り上げていくというように、少しポジティブに思っております。私は今、児童発達支援センターにおりまして、例えば児童発達支援事業所における療育支援と市立幼稚園あるいは私立の幼稚園における特別支援教育について、教育的ニーズと福祉的なニーズとで重なりあう部分は当然あるのではないかと思います。地域的に見ますと、先程地域的に偏在していると申し上げましたが、確かに児童発達支援事業所も5区でばらつきがあるわけです。北区は少ないし、東区はかなり多い。そういったところも少しすり合わせながら、それらの福祉的なニーズや障がい児の通所支援サービス事業の実態も踏まえながら、市立幼稚園における特別支援教育の在り方、新たな価値を見出していくための何か方策を講じていければと思っております。

(委員長)

ありがとうございます。新たな市立幼稚園の新たな価値というお言葉を頂きました、なるほどと思っております。最終的には、私たちが目指すのは、熊本市内に住む子ども達がいかにすべての子ども達がいかに健全に成長していくか、それを支えるのが私達の役目であり、その基盤となるその幼児期の子ども達をどう育てていくか、1人残らず本当にその子に合った支援ができる、そういう基盤を作っていく。そのために公私、それから学校の種類に問わず、みんながそれに向かって何をしていくか、それぞれの立場でお考えいただいていると思います。

今ここではその中の市立幼稚園が、じゃあどこが担えるか、市立幼稚園でどこまでどこをやればいいのかということを、今後、この会でさらに話し合いを進めていって、市立幼稚園のあり方というものをお示しして、今後、基本計画の中に役立てて頂くというのがこの会の役割かなと思っておりますので、そういうことに向けて、次回からはそれぞれのお立場で、またもう一度それぞれのお立場の皆さん方のご意見を集約してお持ちいただいて、さらに良い方向性が見出せるような形の次回につなげられたらと思っております。

今日は第1回目でしたので、それぞれ論点を絞らず、皆さん方のこれまでのご経験やお気づきに基づいて、さまざまな方向に話を進めてまいりましたが、これが元になって、次回進めていけるのではないかとと思っております。

長時間にわたってご議論いただきましてありがとうございました。次回以降は資料でお示しいただいた検討の方向性の論点について、さらに議論を深めてまいりたいと思えます。

これをもちまして、第1回市立幼稚園における特別支援教育等に関する検討委員会を閉会致します。

(事務局)

本日は貴重なご意見ありがとうございました。今回いただいたご意見をもとに、また次回準備を致します。第2回検討委員会は6月18日金曜日15時からを予定しております。詳細については改めてご連絡させていただきます。

それでは本日は大変お忙しい中ありがとうございました。